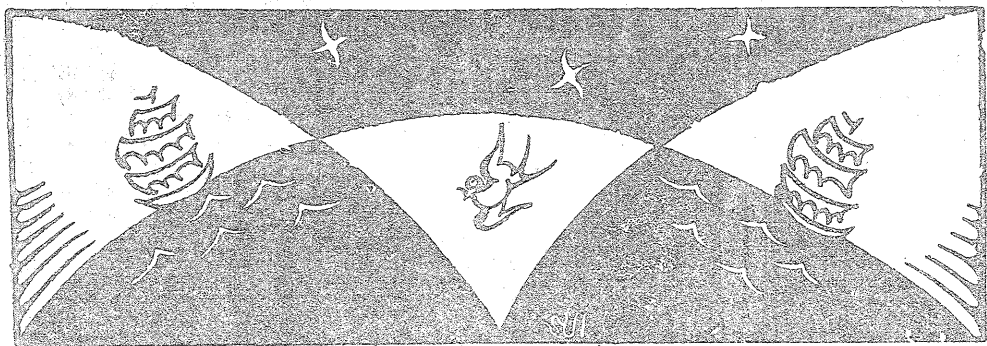


科學 怪 星

エツチ。ヂ。ウエルズ
川 島 章 譯



それは一月一日のことだつた。同時に三つの観測所が、太陽を廻る遊星の中で最も外側に在る海王星の運動の異常になつて来たことを發表した。オデリヰキ氏は、既に十二月中から海王星がその速度を減じたりしと云ふことを注意した。このやうな一片の報告は、住民の大部分が海王星の存在を知らぬやうな世界に興味を起させる筈もなかつたし、又、この揺動を受けた遊星圏内の遙か彼方の、微かな一點の光に就いての其後の發見が、天文學者以外の人々に、大きな衝動を興へると云ふ筈もなかつた。

だが、科學的な人々にとつては、この新しい天體が急速に大きさと光とを増して來るといふこと、その運動が遊星の秩序正しい運行とは甚だ異つてゐるといふこと、海王星と其衛星との偏れ方が前例の無い程になつて來てゐると云ふことが、未だ十分に判らない中から、この報告は注目し得るものだと云ふことになつた。

科學的な教養の無い多くの人々には、太陽系は一の巨大な孤立の存在であると云ふことが、よく分らないであらう。太陽は、その數個の遊星と、無數の小遊星と、微かな彗星とを伴つて、想像も及ばぬ程の廣い空間を動いてゐる。

海王星の軌道の外には、何物も無い空間が存在してゐて、そこは、人類が観測し得た限りでは、百萬哩の二十兆倍の間、熱も光も音も無い、眞黒な空間である。これは一番近い星へ達するまでの距離の、極く内輪な計算である。そして、最も稀薄な炎よりも質量に乏しい二三の彗星の他には、この不思議な星が現れた今日まで、何物もこの空間の端を横切つたことはなかつたのである。

これは、大きな重い物質の塊で、この空の眞黒な處から、突如として太陽の光の中に入つて來たものである。二日目で、それは、正確な機械で微かに直徑が分る位の大きさになつて、獅子座のレジニラス星の

近くに現れた。やがて、それはオペラ・グラスでも見える程になつた。三日目になつて、兩半球の新聞を讀むほどの人々は初めて、この只ならぬ物體が天に現れたと云ふことがなかく、重大な問題だと云ふことに氣付いた。「遊星の衝突」といふ表題を掲げて、ロンドンの新聞は、この不思議な新遊星が、事に依ると、海王星と衝突するかも知れないと云ふ、ダッチンの説を發表した。各新聞の社説には、この問題が誇張して書かれた。それがために、一月三日には世界屈指の首府で、漠然ながら、天界に著しい現象の起ることを豫想してゐた。で、日が沈むと、その晩は世界中で、數千の人が眼を空に向けて眺めてゐた、見慣れた星は、昔ながらに輝いてゐた。

夜明までに、ロンドンとボラックスでは、地平のあたりの空と頭上の星とが蒼白くなつた。それは、弱々しい、濾されたやうな明るさから段々に明るくなつてゆく冬の曉だつた。家々の窓の瓦斯や臘燭の明りは黄色くなつて、中に人の動いてゐるのが見えた。が、欠をしてゐる巡查も、その頭上の星を見た。市場へ急ぐ群衆も口を開けて立ち止つた。時間通りに出掛けて行く労働者も、牛乳配達も、新聞馬車の馱者も、疲れた蒼白い顔をしてゐる朝歸りの遊蕩兒も、宿の無い浮浪人も、巡邏の番兵もそれを眺めた。田舎では、野良へ出て行く百姓や忍んで歸る密獵者たちがそれを眺めた。

目覚めてゆく薄暗い國中の津々浦々で、人々は見た。——また海の上でも、日の出を待つてゐる船員達が見た。——忽如として西方の空に現れたこの大きな白い星を！

それは、どの星よりも光つてゐた。一番よく光る時の宵の明星よりも、まだ光つてゐた。それは白く大きく輝いてゐたが、日が昇つてから一時間も経つと、最早、さらさらする光の點ではなくなつて、小さな、圓い、はつきり、輝く盤になつた。で、科學の及ばないやうな處

では、戦争や疫病の起る前兆が空に現れたのだと話しながら、恐怖に驅られて見詰めてゐた。屈強なブリア人も、薄黒いホットテント人も、黄金海岸の黒人も、フランス人も、イスパニヤ人も、ポルトガル人も、赫灼たる朝日を浴びて立ちながら、この不思議な新しい星の沈むのを見守つてゐた。

最初、遙かな二つの天體が衝突した時、數十の観測所では壓へつけられてゐた興奮が極點に達して、この珍らしい、驚く可き光景——世界の破滅を記録せんとして、寫眞機や分光機其他の設備を整へるために東奔西走したのであつた。それもその筈、この突然に燃焼の死を遂げたのは、實に我が地球の姉妹星で、地球より遙かに大きな遊星だつたからである。そしてこの外方の空間から來た遊星に正面衝突をしたのは、例の海王星で、衝突の發した熱は、即座にこの二つの充實した天體を一つの巨大な白熱體に變へて了つたのである。その日の明け放れる、二時間ばかり前にこの蒼白く大きな星は光を弱めて西方に落ち、太陽がその上に昇つて來た。到る處の人がそれを眺めて驚いたが、わけても始終、星を眺めてゐる船員達ほど驚いた者は無い。遠く海上にゐて、この星の出現について聞くことの出来なかつた船員達は、今や、その星が小さな月かとはかりに昇つて來て天頂に達し、頭上に懸り、夜の更けるにつれて西の方に沈んで行くのを見た。

翌日、その星がヨーロッパの空に昇る時には、到る處の見物人が、丘や坂や屋根や廣場に出て、東の方を眺めながら、この星の昇るのを待つてゐた。やがて、それは白熱の火のやうに輝いて正面に現れた。この星の昇るのを見た者は、「大きくなつたぞ」と叫んだ。「光つて來たぞ」と叫んだ。實際、西に沈みかけてゐる四日ばかりの月は、比較にならぬほど大きかつたが、その面のどの部分にも、この不思議な新しい星ほど輝いたところは、殆ど無かつた。

『光つて来たぞ!』と、人々は街路に集つて叫んでゐた。が、薄暗い観測所の方では、観測者たちが息を殺して代る代る観望しながら。

『近くなつて来たぞ、近くなつて来たぞ!』と叫んでゐた。そして、この事が口々に傳つた。『近くなつて来た』といふ言葉が、電信機で打たれ、電話線を傳つた。幾百千の町々では、植字工が活字を組んでゐた。『近くなつて来た』と。事務所に動いてゐる人たちは、不思議な實感に打たれてペンを置き、幾百千の場所で話してゐる人たちは、俄かに『近くなつて来た。』と云ふ言葉の奇怪な可能性を感じるやうになつた。この言葉は、迅速に、目覚めた街々に傳はり、霜の降りた静かな田舎道に叫ばれた。細長い電信紙からこの言葉を讀んだ人たちは、黄色い燈の點つた扉口に立つて、道行く人に、この新しい知らせを傳へてゐた。『近くなつて来た。』上氣

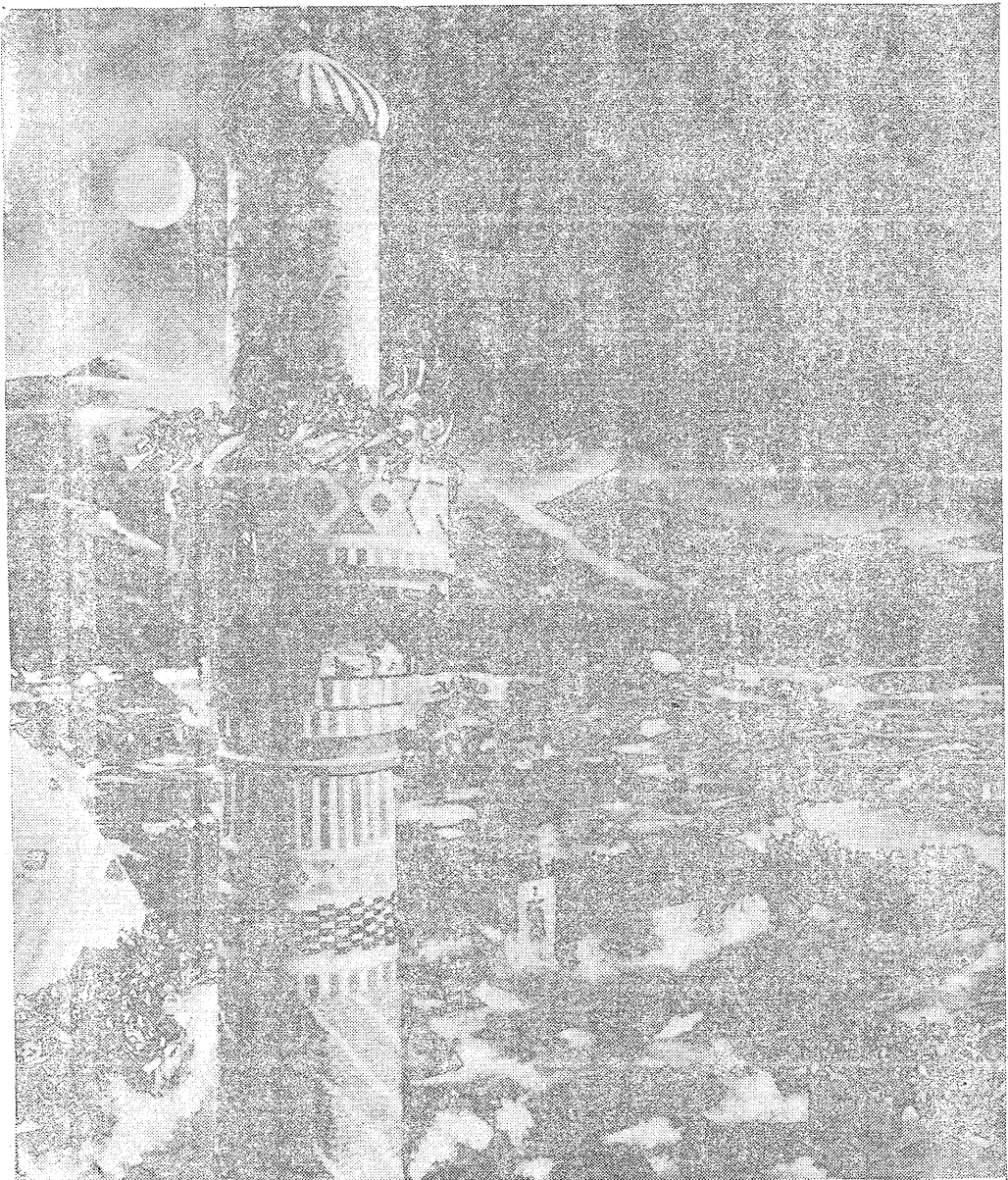


して、眼を輝かしながらこの報知を聞いてゐた美しい女たちは、舞踏の間に、冗談らしくこの話をして、感じてゐるない智識的な興味を、さも感じてゐるかのやうな風をしてゐた。『近くなつて来ましたつて!』何と云ふ珍しいことなんでせう! こんなことが分るなんて、まあ何て賢い方達なんでせう!』

この寒い夜を歩んでゐる淋しい旅人たちは、自ら慰めるために空を仰ぎながら、かう囁いてゐた。

『近くなつて来る必要がある譯さ。夜は、慈善のやうに冷いもの、だが、近づいて来たると云ふのに、ちつとも暖くはならない。同じやうだ。』

また死んだ人の側に跪いて、泣いてゐる女はかう叫んだ。『新しい星が私たちのために何にならるといふんでせう?』



た。その時こそ、世界は異變の起るを見るだらう。この氣味の悪い數學家の警告は、大概の者に、手の掛つた自家廣告のやうに取られた。常識の徒は、討論にいくら熱して来たが、その信念の變つてゐないことは、何時ものやうに寢床へ入つたのも分る。上品なことに倦きた爲に、野蠻な事も、夜の世界に行はれた。又あちこちで遠吠えしてゐる犬の他には、動物の世界もこの怪星に氣が付いてゐなかつた。

ヨーロッパ諸國の觀測者たちが、一時間の中にこの星が昇るのを見るとき、それは前の晩よりも大きくはなかつた。で、多勢の人たちは、數學者を唾ふために——危険が過ぎたものとして——起きてゐた。

しかし、やがて嘲笑の聲は歇んだ、星が、次第に大きくなつて来た——一時間毎にすんくと、大きくなつて来た。だん／＼に眞夜中の天頂に近づいて来た。次第に輝きを増して、夜を晝のやうにして丁つた。それが曲線を描かずに、眞直に地球の方へ向つて来たのだつたらそして、それが木星の方に引き寄せられなかつたら、地球との空間を、一日で飛んで来た筈だつた。が、我が遊星に來るまでには五日かかつた。次の晩にはイギリスで、その星は沈むまでに月の三分の一位に見えて霜溶けがした。

アメリカでは、その星が月位の大きさになつて昇り、見ると眼が眩みさうで熱かつた。又その星が昇ると同時に、熱風が吹き出して、次第に烈しくなつた。ヴァージニアとブラジルとセント・ローレンス河の主流では、雨雲を通して、その星が間歇的に輝き、白紫色の電光が閃めき未曾有の降雹があつた。マニトバでは、雪解けと同時に烈しい洪水があつた。地球上の山といふ山の上では、雪や氷がその晩から溶け始め、高地から流れて來る川といふ川は、満々と濁水を湛へ、やがて——水量が増して來ると——樹や獸や人間を捲き込んで行つた。水溜は次第々々に高まつて、堤防を越えて逃げ行く住民の背後に追つた。

には圓い黒い影が出來た。

アジャでは、空の廻轉につれて、星が落ち始め、やがて印度の上懸ると、その光は曇つて來た。インドス河の口からガンジス河の口までの全平原は、その晩、淺い水に覆はれて、寺院や、宮殿や、塚や小山が水から現はれてゐた。ありとあらゆる尖塔には、人が眞黒にたかつてゐるが、強熱と恐怖に堪えかねて、一人一人、その濁水の中に落ちて行つた。國中が阿鼻叫喚の巻と化した、と見る間に、一つの影がこの絶望の爐上を横斷した。涼しい風が吹き、雲が冷たい空氣のために集つて來た。人々は、盲目に近い眼で、怪星を眺めた時に、黒い圓い影が、その光の上を通り過ぎるのを見た。これは月が怪星と地球との間に入つたのだ。説明し難い速力を以てこの一時の救ひが東方から昇つて來るのを見て人々が神に向つて叫んでゐる時に、今度は太陽が飛び出して來た。かうして、星と、日と、月とが同時に天を渡つてゐた。

この時、ヨーロッパの觀測者たちの眼には、星と太陽とが、前後して昇り、まつしぐらに一方の空間に走つて行き、次第に速力を緩めて、遂に靜止したのが見えた。その星と太陽とが天頂で一つの火の塊になつたのだ。月はもうその星に影を落さなくなつたばかりか、空の明るさで見えなくなつた。生き残つた者も、大部分は飢ゑと疲れと熱と絶望とに起因した無意識状態で、これを眺めてゐたのだが、中には、かうした現象の意味を認めることの出來る者も居た。その星と地球とが最も近い距離にまで近づき、互に捲れ合つて、やがてまた離れて行つたのだ、星は、次第に速く地球を遠ざかつて、太陽の方へと、まつしぐらの旅を續けて行つたのである。

雲が集り、空の影が消え、雷が鳴り、電光が閃き、到る處に未曾有の大雨が降つた。噴火が天を焦してゐる處では泥の雨が降つた。陸地といふ陸地からは、水が退いて、泥が廢墟を埋めてゐた。地には、人

アルゼンチナの沿岸から南大西洋岸にかけては、潮汐が會でなかつた程に高まり、暴風が海水を數千哩の奥地に運んで、町といふ町を浸した。そして、その晩の中に氣温が非常に高くなり、朝日はまるで影のやうに見えた。地震が起り、北極圏から喜望峯に至るまでのアメリカ大陸には、山崩れが起り、地割れが生じ、家や壁が崩壊した。

支那は白熱に照されてゐたが、日本、ジャワ、その他の東方アジアの島嶼では、この星が赤い火の球のやうに見えた。それは噴火し始めた火山から出た水蒸氣と煙と灰とのためだつた。上には、熔岩や熱瓦斯や灰、下には、渦捲く洪水、地は、地震のために鳴動した。やがて消えたことの無いチベットやヒマラヤ山脈の千古の雪が解けて、幾百萬の川となり、深い河床を作りながらブルマやヒンドスタンの平原に流れ降つた。鬱蒼たる印度の大森林は、數百ヶ所で燃え始め、下を流れる黒い激流は、力無くもその火と争つて、眞赤な炎の舌を反射してゐた。戸惑ひした群集は、廣い川を、廣い海へと下つて行つた。

怪星は、怖しい速度を以て、更に大きくなり、熱くなり、光り増つて來た。熱帯の海も、その若い輝きを失ひ、黒い波頭からは、水蒸氣が捲き上り、波の上には、暴風の吹き運んだ船が點々としてゐた。

その時しも、不思議なことが起つた。ヨーロッパで、星の昇るのを眺めてゐる者には、この世界が自轉を止めたやうに見えた。幾百千の廣場では、洪水と、家屋の倒潰と、山崩れとから逃れて來た人々が、空しく、この星の昇るのを待つてゐた。怖しい不安の數時間は過ぎたが、星は昇つて來なかつた。人々は、再び、永久に見られなれないと思つてゐた昔ながらの星座を仰いだ。イギリスでは、空は熱く、地は絶えず震へてゐるが、シリウスとカペラとアルデバランとが、水蒸氣のヴェールを透けて、回歸線上に眺められた。やがて十時間も遅れて、例の大きな怪星が昇つて來ると、太陽がその側に現れ、その白熱の中心

間や獸の死骸が累々と散ばつてゐた。

數日の間、水が陸地から流れて、土や樹や家を選び去り、大きな溝を掘り、山國には巨大な滾を掘つて行つた。暗黒の日が幾日も續いた。何日も、何週間も、何ヶ月も地震が續いた。

しかし、怪星は去つた。人は、飢ゑに追はれて、廢墟の町に、埋れた穀倉に、水に浸つた野に歸つた。暴風を逃れた船は惨々に破損して、奇妙な處や、前には港であつた處の洲などを注意深く探りながら歸つて來た。暴風が鎮つた時に、どこでも前より熱くなつたこと、太陽が大きくなつたこと、月が前の三分の一の大きさになつたこと、満月から満月までの間が八十日になつたことなどを人々は認めた。

しかし、新しく生じた人間同志の友情とか、法律や、本や、機械の節用とか、イスラランドやグリーンランドやバフィン灣海岸などに不思議な變化が起つて、そのあたりへ航海して行く船員たちが、その青靑と美しくなつてゐるのを見て、自分達の眼を信じることの出來なかつたこととかに就いては本篇には語らない。また地球が南方も北方も極地までも暖くなつて以來の、人類の言動に就いても、何も語らない。こゝではたゞその星が近づいて來て、遠ざかつて行つたことに就いてだけ語ることにした。

火星の天文學者——人間とは違ふが火星にも天文學者がある——は、勿論、これ等の出來事に深く興味を感じたであらう。彼等も亦その立場から眺めてゐるに相違無い。太陽系を通じて、太陽の中に没入した星の質量と温度とを考察するに、或る者は書いた『地球がいかに僅かの損傷をしか受けなかつたか』と云ふことは、驚く可きことである。見慣れた大陸の標と海らへい大量とはその儘に残つてゐて、變つたのは、兩極の白い部分結氷と想像されるが、收縮したことだけである。これは、人類の最大の悲劇さへが數百萬哩も離れた處では、いかに小さく見えるかといふことを示してゐるに過ぎない。(一)